

# 新しい戒め — A New Command \*

鈴木寛 (Hiroshi Suzuki)

## 1 ヨハネによる福音書 13章 34,35 節

あなたがたに新しい掟を与える。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。互いに愛し合うならば、それによってあなたがたがわたしの弟子であることを、皆が知るようになる。」(新共同訳)

わたしはあなたがたに新しい戒めを与えます。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。互いの間に愛があるなら、それによって、あなたがたがわたしの弟子であることを、すべての人が認めるようになります。」(新改訳 2017)

“A new command I give you: Love one another. As I have loved you, so you must love one another. By this everyone will know that you are my disciples, if you love one another.” (New International Version)

“A new commandment I give to you, that you love one another; as I have loved you, that you also love one another. By this all will know that you are My disciples, if you have love for one another.” (New King James Version)

## 2 あいさつ

クリスマスおめでとうございます。このたびは、ICU KGK のクリスマスにお招き下さりありがとうございます。実は

\*国際基督教大学 KGK クリスマス, 2018 年 12 月 19 日 (水), シーベリーチャペル集会室

わたしも忘れていたのですが、お招きをいただいてから調べてみたら、2004 年にも ICU KGK のクリスマスにお招きいただいていましたので、今回二回目となります。

ご存じのかたもおられると思いますが、わたしは、2003 年 4 月から我が家で、聖書を読む会を学期中の毎週木曜日にもっており、2015 年 4 月からは三年間、ヨハネによる福音書を読み、2018 年、今年の 4 月からは、ヨハネの手紙一・二・三と読んできましたので、今日も、これらの聖書の箇所を中心に、お話しさせていただこうと思っています。<sup>1</sup>

わたしが、どのようにして、クリスチャンになったかに興味を持たれる方がおられるかもしれませんので、2009 年の C-Week の Special Introduction to Christianity で、お話しさせて頂いたときのスクリプトを持ってきました。何回か配布していますので、すでにお読みになった方もおられるかと思います。興味のある方は、読んで頂ければと思います。同じではありませんが、重複した内容をアメリカでも、インドネシアからの留学生向けに、話したことがありますので、英語で読みたいかたは、そちらのスクリプトも少し持ってきました。読んで頂ければ幸いです。

私のホームページには、いくつも、証や、メッセージの原稿などが置いてありますが、今日、お持ちしたのは、私以外の個人に関わることも含まれているため、ホームページには掲載してありません。その点は、ご理解頂ければ幸いです。

## 3 互いに愛し合いなさい

皆さんは、イエス様が、もっともたいせつなこととして、わたしたちに教えて下さったのは、何だと思いますか。わ

<sup>1</sup>次の 3 月末で定年退職しますので、1 月はじめに、学内住宅を出るため、聖書の会も終わりにすることとしました。

たしは、ヨハネによる福音書 13 章 34 節の

あなたがたに新しい掟を与える。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。 (新共同訳)

ではないかと思っています。新共同訳では「新しい掟」となっていますが、新改訳では「新しい戒め」となっています。これは、イエス様が十字架にかかれる直前に、弟子たちと最後の食事をしたときに、語られた言葉です。

「互いに愛し合いなさい」と教えられています。

これは「新しい戒め・掟」と「新しい」と、イエス様は言っておられます。なにが新しいのでしょうか。「愛」はイエス様の説かれた中心的な教えだと思えますが。

マタイによる福音書 22 章の 34 節から 40 節では、律法の専門家の「先生、律法の中で、どの掟が最も重要でしょうか。」という問いに対して、イエス様は『心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』(22 章 38 節) これが最も重要な第一の掟である。第二も、これと同じように重要である。『隣人を自分のように愛しなさい。』(22 章 39 節) 律法全体と預言者は、この二つの掟に基づいている。(22 章 40 節) と答えておられます。

一方、善きサマリア人のたとえの前(ルカによる福音書 10 章 25 節から 28 節)では、「先生、何をしたら、永遠の命を受け継ぐことができるでしょうか。」との(律法の専門家の)問いに、イエス様が、「律法には何と書いてあるか。あなたはそれをどう読んでいるか」と逆に問いかけられ、律法の専門家の方から『心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい、また、隣人を自分のように愛しなさい』とあります。」と答えていますから、旧約聖書からのこれらの引用は、イエス様以外のひとたちも、特別に重要だと考えていたようです。

ですから、神を愛することも、隣人を愛することも、おそらく、「新しい」というわけではなかったでしょう。わたしは、「新しい」理由は、次の二つかなと考えています。一つ目は「わたしがあなたがたを愛したように」つまり、

イエス様が、弟子たちを愛したようにということが加わっていること。そして、もう一つは「互いに愛し合いなさい」の「互いに」という部分ではないかなと思います。皆さんは、どう思われますか。

まず、「わたしがあなたがたを愛したように」の部分を考えてみたいと思います。これは、日本語からもわかるように、過去形で書かれています<sup>2</sup>。イエス様が、十字架に架かる前に言われたことなので、これは、十字架によるあがないの死を通して示された、愛を意味するとするのは、ちょっと急ぎすぎではないかと思えます。実際、このことばが書かれている、ヨハネによる福音書 13 章は「さて、過越祭の前のことである。イエスは、この世から父のもとへ移る御自分の時が来たことを悟り、世にいる弟子たちを愛して、この上なく愛し抜かれた。」(1 節)と始まりますから、それまでもずっと愛しておられ、最後の最後まで愛し抜かれたということでしょう。

この 13 章には、イエス様が、弟子たちの足を洗う記事が書かれているのですが、イエスを裏切ることになる、イスカリオテのユダも、イエスが愛し抜かれた、弟子たちの中に含まれていることも、注意に値するでしょう。ヨハネによる福音書にはかなり早い段階から、弟子たちの中に裏切るものがあることを、周囲にも告げていたことが書かれています。驚くべきことです<sup>3</sup>。イエス様は、弟子たちと会った最初から、ずっと、様々な弟子たちひとり一人を愛され、おそらく苦しまれ、最後の最後まで、弟子たちを愛し抜かれたのでしょう。

他の三つの福音書(共観福音書)には記されていませんが、ヨハネによる福音書には、イエスがかまるときに、イエスが、ご自分を捕まえに来た人たちに言って、弟子たちを逃がしたことが記録されています<sup>4</sup>。そのような様々

<sup>2</sup>実際 Aorist καθὼς ἠγάπησα ὑμᾶς (even as I loved you) で書かれているが、英訳はほとんど、現在完了形をとっている。いずれにしても、これからのことを言っているのではない。

<sup>3</sup>すると、イエスは言われた。「あなたがた十二人は、わたしが選んだのではないか。ところが、その中の一人は悪魔だ。」イスカリオテのシモンの子ユダのことを言われたのである。このユダは、十二人の一人でありながら、イエスを裏切ろうとしていた。(ヨハネによる福音書 6 章 70,71 節)

<sup>4</sup>18:8 すると、イエスは言われた。『わたしである』と言ったではないか。わたしを捜しているのなら、この人々は去らせなさい。』

な場面でのイエスの愛に思いを巡らせながら、弟子たちは、イエスは、自分たちへの愛のゆえに、十字架の上で死なれたと理解したのかもしれませんが。

わたしは、もうひとつ「互いに」という部分が「新しい」のではないかと考えています。ヨハネの手紙一の最初の部分（1章1節から4節）には次のようにあります。

1:1 初めからあったもの、わたしたちが聞いたもの、目で見えたもの、よく見て、手で触れたものを伝えます。すなわち、命の言について。――  
1:2 この命は現れました。御父と共にあったが、わたしたちに現れたこの永遠の命を、わたしたちは見て、あなたがたに証しし、伝えるのです。――  
1:3 わたしたちが見、また聞いたことを、あなたがたにも伝えるのは、あなたがたもわたしたちとの交わりを持つようになるためです。わたしたちの交わりは、御父と御子イエス・キリストとの交わりです。1:4 わたしたちがこれらのことを書くのは、わたしたちの喜びが満ちあふれるようになるためです。（新共同訳）

ここで書かれている「命の言」、「永遠の命」は、イエス様のことではないかと思えます。「わたしたちが見、また聞いたことを、あなたがたにも伝えるのは、あなたがたもわたしたちとの交わりを持つようになるためです。わたしたちの交わりは、御父と御子イエス・キリストとの交わりです。」（3節）とあります。神様と、イエス様の交わりと同じ、またはその関係と同じような、弟子たちの交わりを、この手紙の受け手たちも、持つようになるためと言っています。

「交わり」はコイノニア (κοινωνία) というギリシャ語が使われていますが、ひとつの命、すなわち、永遠の命を共有・分かち合って、互いに愛し合う生活を送ること、とも言えるのではないのでしょうか。ヨハネによる福音書を読んでいると、イエス様は、神様のもとから来られたこと、父なる神様のところとびったんこ、イエス様がなされる業は、神様の業だということが、何度も、書かれています<sup>5</sup>。

<sup>5</sup>4:34 イエスは言われた。「わたしの食べ物とは、わたしをお遣わしになった方の御心を行い、その業を成し遂げることである。 10:37, 38

父なる神様が御子イエス・キリストを愛し、イエス様が、神様のところをところとし、神様がなされる業をなす、そのような交わりを、弟子たちも持ち、この手紙をうけとったひとたちも、そしてわたしたちも、その交わりに招かれているように思います。

しかし、この「互いに」というのは、簡単ではないかもしれませんがね。神様と、イエス様の交わりのような、交わりが、想定されているのですから。しかし、一方が頑張って愛するのではない、互いに愛し合うというのは、素晴らしいことではないでしょうか。

## 4 愛する・たいせつにする

ヨハネによる福音書には、愛するという動詞が多く使われていますが、そのギリシャ語は、ἀγαπάω (agapao) です。もともとの意味は、Welcome とか、Entertain という意味のことばです。すると、先ほどの聖書の箇所は、「互いに Welcome し合いなさい。わたしがあなたがたを Welcome したように、あなたがたも互いに Welcome し合いなさい。」となります。おそらく、Welcome しにくい、または、したくないひともいるでしょうね。もしかすると、自分のことを、Welcome できないときもあるかもしれません。

ちょっと話はそれますが、わたしは、小学校のおそらく4年生ぐらいのころ、ナポレオンの伝記を読んで、そこに「わたしの辞書に『不可能』ということばはない」とあったので、わたしは、どう言おうかと考えて「わたしの辞書に『めんどくさい』ということばはない」ということにしようと決め、くそまじめに、いろいろなことをしていたころがあります。むろん、「面倒くさいことをいやがらずにする」という程度の決意表明だったのだと思うのですが、少しずつ、成長するにつれ、本当に面倒なのは、何らかの作業ではなくて、「ひと」だなど思うようになりました。そして、一番めんどうなのは、自分かもしれないと。かみさまは、そんな、めんどうなわたしをも、面倒がらずに、Welcome してくださる。そのことを、知って、わたし、わたしが父の業を行っていないのであれば、わたしを信じなくてもよい。しかし、行っているのであれば、わたしを信じなくても、その業を信じなさい。そうすれば、父がわたしの内におられ、わたしが父の内にいることを、あなたたちは知り、また悟るだろう。」

しも、めんどろな他者を Welcome するように、招かれて  
いるのかもしれないと考えるようになってきました。

2011 年ごろから、大学の役のひとつとして、困難を抱  
えた学生さんたちの支援をしてきました。障害もふくま  
れますが、精神的な困難や、経済的な困難など、様々な困  
難のために、大学に来ることができなくなったり、大学に  
は来ることができても、授業には出席することができな  
かったりしている学生さんたちの支援です。なかなか、心  
を開いては話さない場合が多いのですが、そのひとの居  
場所としての、クラブであったり、学外でのそのひとの安  
心できる場所まで会いに行ったりしました。そこで感じた  
のは、そのように、飛び回って支援しようとしても、限界  
がある。さらに、その様な支援が良いかどうかかわらない  
と言うことです。交わり、それも、ゆるやかな「互いに」  
という関係が不可欠なのだろうと、考えるようになりました。「互いに」は英語では、‘one another’ 二人の関係で  
はなく、何人もの間での関係です。

Welcome するとは、どのようなことでしょうか。日本  
語で「愛する = Welcome する」とはどのようなことか、  
伝えるときには、わたしはまず「たいせつにする」ことか  
なということにしています。「たいせつなひとをたいせつ  
にするとは、たいせつな人の『たいせつな人』や『こと』  
や『もの』をたいせつにすること」でしょうか。

わたしは、一般教育科目を教えるときには、小テスト  
の下にメッセージ欄というものをもうけて、受講生とメッ  
セージのやりとりをしています。そのひとつに「あなた  
にとって一番たいせつな（または、たいせつにしたい）も  
の、ことはなんですか<sup>6</sup>。」という問いがあります。実は、  
今学期も教えていて、まさに、今日の朝の小テストのメッ  
セージ欄の問がこれでした。みなさんは、どのように答え  
ますか。何年も、この問いを続け、学生さんが書いてくだ  
さったことをホームページ上<sup>7</sup>で共有していますが、圧倒  
的に多いのが、家族と友人です。ひとり一人に、短い応答  
を書いています。そのときには「その方にとって、一番  
たいせつな（または、たいせつにしたい）もの、ことは何

<sup>6</sup>今学期は英語開講：What is most precious to you?

<sup>7</sup>[https://icu-hsuzuki.github.io/science/class/ns1b/ns1b\\_message-j.html](https://icu-hsuzuki.github.io/science/class/ns1b/ns1b_message-j.html)

でしょうか。たいせつにしてください。」と書いたりしま  
す。たいせつだとは思っていても、たいせつなひとにとっ  
ての「たいせつなひと」や「こと」や「もの」については、  
あまり考えていないことも多いのではないのでしょうか。

## 5 Ghibli Museum ジブリ美術館

先週の土曜日、家族で「ジブリ美術館」に行ってきました。  
我が家は、5 人子どもがいて、そのうち 2 人が結婚し  
ていて、孫が全部で 3 人いるので、総勢 12 人。ご存じの  
ように、とても、混んでおり、なかなか、チケットがとれ  
ないので、三鷹市民であるうちに家族でいくことにしま  
した。市民枠を使ったので、チケットはとれたのですが、  
予想通り、とても混んでいました。みなさんは、行かれた  
ことがありますか。

正直、感銘をうけました。細部に至るまで、こころが  
通っているというか、手を抜かない凄さに、圧倒されまし  
た。そこまでは、見ていないのではないかと思われるよう  
なところまで、行き届いた心遣い。制作者たちの、愛を  
感ぜずにはいられません。それは、誰への愛なの  
でしょうか。自分たちの作品への愛、見る人ひとり一人へ  
の愛、いのちのいとなみ自体への愛でしょうか。みなさん  
は、どう思われますか。

わたしは、長年、韓国からの宣教師のかたを、サポー  
トしている関係で、韓国の教会でメッセージをしたことが  
あるのですが、そこで知り合った、とても熱心な大学生た  
ちが、ジブリ作品のファンで、熱をこめて、どれぐらい好  
きかを語った後、どうしても、宮崎駿さんに、クリスチャ  
ンになってほしいと言っていました。純粹に、感動し、そ  
して、そこに、制作者の愛を感じ、その素晴らしさの背後  
で神様はどのように働いておられるのだろうと、わたし  
はまず思い巡らしたいと思いましたが、みなさんは、どう  
思われますか<sup>8</sup>。

<sup>8</sup>素晴らしい人は、クリスチャンでなければ、おかしいという論理が背  
景にあるのではないかと心配になったと同時に、好きなひとを Welcome  
する背後に、好きになれないひとは Welcome しないという気持ちも  
見え隠れすることを、自分自身経験してきたため、このようなことに敏  
感になっている、わたしのひねくれた心もあるのかもしれない。クリス  
チャンとはどのような人のことなのだろうか。

わたしは、数学を専門としていますが、専門として研究しているからこそ味わえる、ぞくぞくする感動をなんども味わってきました。なかなか共有はできませんが、わたしのたいせつにしているもののひとつから、数学をはずすことはできない、そして神様の素晴らしさをほめたたえることともつながっていると思っています。

みなさんも、いま、大学で、いろいろなことを勉強しておられる。なにか、没頭しているクラブなどの活動もあるかもしれません。もしかすると、音楽のようなものかもしれません。それは、みなさんが、たいせつにしていることですが、友人が、自分がたいせつにしているものを、たいせつにしてくれるのは、とても嬉しいですね。それは、すでに、聖書で言っている、愛することとはずれてしまっているのでしょうか。

わたしは、そうではないように思います。たいせつに生きて、そこにそのひとの尊厳、そのひとがたいせつな一人の人である本質があり、そのひとのいのち自体もあるのではないかと思います。皆さんも、フィリピの信徒への手紙 4 章 9 節の次のことばをご存知かと思ひます。

(終わりに、) 兄弟たち、すべて真実なこと、すべて気高いこと、すべて正しいこと、すべて清いこと、すべて愛すべきこと、すべて名誉なことを、また、徳や称賛に値することがあれば、それを心に留めなさい。

東京女子大学は、ICU が設立されるもととなった大学ですが、その本館には「すべて真実なこと」のラテン語 ‘QUAE CUNQUE SUNT VERA (クワエクムクェ・ストゥ・ウエーラ)’ が、掲げられています。「大学への希望を特に示すもの」と説明されています<sup>9</sup>。

愛から、そのひとにとってのたいせつなものをたいせつにするということから、はじめて、考えてきましたが、たしかに、ちょっと、離れすぎたかもしれません。そのひとの「たいせつなひと」や、「もの」や「こと」をたいせつにすることは「受容」受け入れることとも言えるかもしれませんが、それがどうみても、問題があるのではないかと思うときにはどうしたら良いでしょうか。それに対

<sup>9</sup><http://office.twcu.ac.jp/univ/about/introduction/mark/>

して、ある精神科医<sup>10</sup>は「受容は、それでいいよ、ではなく、あなたのことをおしえてください」からはじめることと言っていました。とても深い言葉だと思います。わたしも「あなたのことをおしえてください」からはじめたいと思います。

## 6 掟とは

最後に、ほんとうに「互いに愛し合うこと」だけでいいのということを考えてみようと思います。神様の御心、すなわち、神様が望んでおられることは、他にもたくさん、聖書に書いてあるのではないのでしょうか。

ヨハネの手紙一 3 章 23 節には

その掟とは、神の子イエス・キリストの名を信じ、この方がわたしたちに命じられたように、互いに愛し合うことです。 (新共同訳)

とあります。ここでの「掟」は定冠詞がついていて、単数で ἡ ἐντολή (he entole) が使われています。中身は「神の子イエス・キリストの名を信じ」ることと「互いに愛し合うこと」の2つのようですが、このあとを読み進めると、後半のほうに、重きがあるようです<sup>11</sup>。そして、ヨハネの手紙一 4 章 7 節には次のようにあります。

愛する者たち、互いに愛し合ひましょう。愛は神から出るもので、愛する者は皆、神から生まれ、神を知っているからです。 (新共同訳)

このように、言い切ってしまうと大丈夫なのかとすら思うほどです。

今回、ヨハネの手紙一を読んでいて、もう一つの発見は、罪についてです。3 章 4 節にはつぎのようにあります。

罪を犯す者は皆、法にも背くのです。罪とは、法に背くことです。

<sup>10</sup>筑波大学の齋藤環が NHK ラジオで話していたのを聞いたもの

<sup>11</sup>ヨハネの手紙一 5 章 1,2 節 イエスがメシアであると信じる人は皆、神から生まれた者です。そして、生んでくださった方を愛する人は皆、その方から生まれた者をも愛します。このことから明らかなように、わたしたちが神を愛し、その掟を守るときはいつも、神の子供たちを愛します。

ここで、「法に背くこと」と訳されている単語は、ἀνομία (anomia) という言葉ですが、英語では、lawlessness と訳されており、掟がない状態です。辞書<sup>13</sup>には「無知から、または、それを破ることによって、掟がない状態になること」と書かれてあります。つまり「神様が何を望まれるかを知らないこと、知っていてそれをしないこと、または、それに反することをすること」とも言えるでしょう。

イエスさまによって、罪からわたしたちを、贖いだしてくださった神様は、神様の御心、望まれることがなにかを教えてくださいましたのだと思います。それが、「互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。」(ヨハネによる福音書 13 章 34 節) なのではないでしょうか。

イエス様は、最後の最後に、この掟を弟子たちに委ねました。そして次のように続けています。

互いに愛し合うならば、それによってあなたがたがわたしの弟子であることを、皆が知るようになる。(ヨハネによる福音書 13 章 35 節 (新共同訳))

## 7 ヨハネについて

ヨハネは、イエスの、おそらくほとんど最初の弟子たちの一人だと思われませんが、ペトロや、パウロが殉教の死をとげてからも、さらに、40 年ぐらい生きていたと言われています。迫害があったり、教会の中での、分裂があったり、違った教えを説くひとたちがでてきたり、おそらく、悲しいこともたくさんあったでしょう。そのなかで、イエスが愛してくださったことをころから受け取った<sup>14</sup>ヨハネが、ずっと証しし続けたことが、このことばなのではないかと思えます。この教えにとどまること、それが、光のうちを歩むことであり、イエス様への道、真理の道、いのちの道だと証ししているのではないのでしょうか。

<sup>12</sup>Everyone who sins breaks the law; in fact, sin is lawlessness. (New International Version)

<sup>13</sup>Thayer's Greek Lexicon

<sup>14</sup>「イエスの愛しておられた弟子・者」(ヨハネによる福音書 13 章 23 節、20 章 2 節、21 章 7 節、20 節)

## 8 おわりに

今日は、神の御子、イエス様が、わたしたちと同じ肉体をとって、この世を歩かれ、ひとを愛し続けられ、そのことを通して、神様の御心を教えてくださいました、そのメッセージをうけとる日でもあると思います。

光が世に来たのに、人々はその行いが悪いので、光よりも闇の方を好んだ。それが、もう裁きになっている。(ヨハネによる福音書 3 章 19 節 (新共同訳))

はっきり言うておく。わたしの言葉を聞いて、わたしをお遣わしになった方を信じる者は、永遠の命を得、また、裁かれることなく、死から命へと移っている。(ヨハネによる福音書 5 章 24 節 (新共同訳))

「互いに愛し合う」交わりへの招きに、背を向けて、闇にとどまるのではなく、応答して生き、この命に生かされていきたいと思えます。

互いに Welcome し合いましょう。イエスさまが、わたしたちを Welcome してくださったように、わたしたちも互いに Welcome し合いましょう。イエスさまにとって、たいせつな、わたしたちの兄弟姉妹そして隣人(となりびと)の、たいせつなものを、おしえてもらい、イエスさまなら、どのようにされるかを考えながら。

## 9 いのり

祈ります。

神様、ここにおられる一人ひとり、あなたが愛しておられるひとり一人とともに、あなたが招いてくださったように、互いに愛し合い、お互いに、Welcome し合う、交わりを、あなたとともに、喜びとするようにしてください。イエス様の御名によって祈ります。

アーメン。